

地域高齢者におけるタイプ別閉じこもり発生の予測因子

2年間の追跡研究から

シンカイ ショウジ フジタ コウジ フジワラ ヨシノリ クマガイ シュウ
 新開 省二* 藤田 幸司* 藤原 佳典* 熊谷 修*
 アmano ヒデノリ ヨシダ ヒロト トウ グイ ワン
 天野 秀紀* 吉田 裕人* 寶 貴 旺*

目的 地域高齢者における閉じこもり発生の予測因子をタイプ別に明らかにする。

方法 新潟県与板町の65歳以上の全住民1,673人を対象として2年間の前向き疫学研究を行った。ふだんの外出頻度が「週1回程度以下」にあるものを閉じこもりと定義し、そのうち総合的移動能力尺度でレベル1（独力で遠出可能）あるいは2（独力で近隣外出可能）にあるものをタイプ2、同レベル3以下（独力では近隣外出不可能）にあるものをタイプ1と二つに分類した。初回調査時にレベル1, 2かつ非閉じこもりにあった1,322人（応答者1,544人の85.6%）について2年後の状況を調べ、レベル1, 2非閉じこもりを維持、タイプ1に移行、タイプ2に移行、レベル3以下非閉じこもりに移行の4群に分類した。分析においては、まず、追跡調査時もレベル1, 2非閉じこもりを維持していた群を基準として、タイプ1あるいはタイプ2に移行した群との間で、初回調査時の身体、心理、社会的特性の分布を比較した。次に、多重ロジスティックモデル（ステップワイズ法）を用いて、性、年齢を調整しても有意な関連性を示した変数全てをモデルに投入し、レベル1, 2非閉じこもりからタイプ1あるいはタイプ2に移行することの予測因子を抽出した。

成績 初回調査時にレベル1, 2非閉じこもりであったものの2年後の状況は、レベル1, 2非閉じこもりが1,026人（77.6%）、タイプ1が22人（1.7%）、タイプ2が63人（4.8%）、レベル3以下非閉じこもりが29人（2.2%）であった〔追跡不可（死亡等含む）は182人（13.8%）〕。タイプ1への移行を予測するモデルに採択された変数（予測因子）は、年齢（高い、5歳上がるごとのオッズ比〔95%信頼区間〕は2.10〔1.36-3.24〕）、就労状況（なし、4.42〔1.21-16.2〕）、歩行障害（あり、4.24〔1.37-13.1〕）、認知機能（低い、5.22〔1.98-13.8〕）であり、タイプ2のそれは、年齢（高い、5歳上がるごと1.65〔1.32-2.06〕）、抑うつ傾向（あり、2.18〔1.23-3.88〕）、認知機能（低い、2.72〔1.47-5.05〕）、親しい友人（なし、2.30〔1.08-4.87〕）、散歩・体操の習慣（なし、2.21〔1.26-3.86〕）であった。

結論 地域高齢者におけるタイプ1閉じこもりの発生には身体・心理的要因が、タイプ2閉じこもりのそれには心理・社会的要因が、それぞれ主に関与していることが示唆された。閉じこもりの一次予防に向けた戦略はタイプ別に組み立てる必要がある。

Key words : 地域高齢者, タイプ1閉じこもり, タイプ2閉じこもり, 予測因子, 追跡研究

* 東京都老人総合研究所地域保健研究グループ
 〒173-0015 東京都板橋区栄町35-2
 東京都老人総合研究所地域保健研究グループ
 新開省二